

ドイツ「多世代の家」プロジェクトから見る自立的地域構築のプロセス - 自立的地域構築のための要点の探求 -

THE PROCESS OF BUILDING SELF-SUSTAINING COMMUNITIES AS SEEN IN THE GERMAN “MEHRGENERATIONENHAUS” PROJECT

Research into the essentials for building an independent region

○小篠隆生^{*1}, 山田あすか^{*2}
OZASA Takao, YAMADA Asuka

This research aims to investigate and analyze the German “Mehrgenerationenhaus” project in order to extract the mechanisms and necessary elements for how self-reliant communities are formed through the process of creating local community hubs. We hypothesized that the flexibility and diversity of the project, from planning to implementation, would make it possible to cross borders and connect different fields, and that this would make it easier to solve a variety of problems.

As a result, it was revealed that in order to promote the self-sustaining of local communities through the redevelopment of community hubs, there is potential in reconnecting people through the act of finding new value by crossing and transcending activity domains in activity programs and methods.

Keywords : MGH, Community Center, Art, Culture, Operating Organization, Self-Sustaining Region
多世代の家, コミュニティセンター, アート, 文化, 運営団体, 自立的地域

1. 研究の背景と目的

超少子高齢化状態は、特に地方都市では、その傾向が著しく深刻である。その傾向の中で地方が生き残っていくためには、地域コミュニティをどのように自立的に再生、維持していくかの方策が必要である。また、人口減少に伴い、高度成長期に整備されてきた各種の公共施設をどのように再編していくかも大きな課題であり、地域公共施設の再編の機会を使ってコミュニティの拠点を作り直して行こうとする動きも注目されている。しかし、老朽化し、当初の機能を停止・廃止された公共施設に他の機能を導入したり、異なる公共施設同士を複合化したりする計画は、既存の公共施設設置の制度や管理に関する考え方などが大きな壁になってうまく進んでいかないことが課題となっている。

昨年までの研究では、日本と同様に少子高齢化が進むイタリアとドイツに着目してそれぞれが実施している

コミュニティ拠点再生施策を例にとりながら、コミュニティ拠点形成の方向性を明らかにした。そこで、本稿では、一昨年（2023年）から継続的に研究を進めているドイツ連邦政府の政策として2007年にスタートした「多世代の家」プロジェクト（Mehrgenerationenhaus）に着目する。ドイツ全国で570施設の中から政府の評価、利用者の評判などから抽出をし、それを申請団体、立地都市の規模、内容などから分類抽出したものを2023年9箇所、2024年15箇所を抽出し、インタビュー調査、現地調査を行い、さらに2024年には連邦政府家族省へのインタビューを行い、政策の意図や全体についての考え方を政府の担当者から直接ヒアリングを行った。それらをもとにして地域のコミュニティ拠点形成のプロセスによって、自立的地域がどのように形成されていくのかのメカニズムとその時に必要な要素を抽出することを目的とする。

*1 一般社団法人 新渡戸遠友リビングラボ 理事長, 東京電機大学未来科学部建築学科 研究員・博士（工学）

*2 東京電機大学未来科学部建築学科 教授・博士（工学）

*1 Chairman of the Board, General Incorporated Association Nitobe En-yu Living Lab., Researcher, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

*2 Professor, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

2. 研究の方法

2.1 多世代の家プロジェクトの特徴とブレイクスルーの方向性

「多世代の家」プロジェクト申請団体は、地方自治体に限らず、法人としてドイツ社会に認められた全ての団体が応募でき、単一でも複数の団体でも申請することが

できる。この制度の目的は、まさにドイツ社会が直面する各年齢層が抱える困難（例えば、生活支援、子育て、家庭問題、貧困、社会的孤立、健康、進学、就労など）や、幅広い生活に関わる課題を人種も超えて解決していくために国と自治体（市、区）から支援を受けて拠点つくるためである。なお、州が独自に行っている家族支

表1 調査した多世代の家と地区の家の概要

				運営団体					利用対象								
調査年	MGH事例	名称	立地場所	市町村	宗教法人系団体	高齢者施設運営団体	非営利活動団体・その他	活動内容	乳幼児/保育	学童	青少年	ファミリー	移民(若年/求者)	移民(シニア)	貧困/低所得者	障害者	高齢者
2023	1	ハウス・シュタインシュトラッセe.V. ライプツィヒ・ズートヴォルシュタット	ライプティヒ市				○	幼児～青少年のアート活動、子育て支援、高齢者のアート＆文化活動	○	○	○						○
	2	Kultur- und Begegnungszentrum Ariowitsch-Haus e.V., アリオビツチハウス(社会文化センター)	ライプティヒ市				○	ユダヤ・コミュニティへの支援		◎				◎			○
	3	Dorflinde im Langenferd	ランゲンフェルト村	○				過疎集落の再生		○	○						◎
	4	Caritas Seniorenzentrumカリタス高齢者センター/ Mehrgenerationenhaus St. Elisabeth多世代の家聖エリザベス	ヴェルツブルク市		○	○		高齢者施設へのMGHの併設、移民支援					○				◎
	5	SOS-Kinderdorf Nürnberg Mehrgenerationenhaus Schweinau	ニュルンベルク市				○	家に居られない青少年の保護活動、移民の子供支援、貧困支援		○	◎				◎		
	6	MGH AWOtheek Südstadt, AWO Bezirksverband Ober- und Mittelfranken e. V.	ニュルンベルク市				○	高齢者の生きがいとしての仕事、移民の就労支援としての「名誉ある労働」		○				◎		○	○
	7	MGH Groß-Zimmern	ダルムシュタット市ディールブルク地区		○			子育て支援、子供の活動、高齢者の活動	○	◎							○
	8	Stadtteilzentrum Hirschsprung-Breitensee	ドライアイヒ市	○	○			空港近くの集合住宅地をsocial housing town化、複数建物を組織	○	○			○				○
	9	SchillerHaus	レーダーマルク市	○				団地内スーパーの空き建物をコミュニティセンターに改修		○		○					○
2024	10	MGH ヴィラ・リュッツォー	ベルリン市				○	児童・青少年への支援や移民のケア、LGBTQへの対応		○	○		○	○	○	○	○
	11	MGH ロベルト	ベルリン市				○	多世代交流と障害者支援＋障害者用宿泊施設	○	○	○	○				○	○
	12	ナッハバルシャフツツレフ シラーキーツ	ベルリン市				○	町内会館活動をベースにした小規模MGH社会教育系講座、家庭相談、展示活動			○		○	○	○	○	○
	13	MGHハンブルク アルトナ地区 FLAKS	ハンブルク市				○	女性に限定した支援活動、移民のドイツ社会への融和支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	14	MGH ナッハバルシャッツ	ハンブルク市				○	保育所、カフェ、助産師オフィス、子どもショートステイ	○	○		○					
	15	シフベクとエージェンドルフ教区	ハンブルク市		○			教会、託児施設、MGHが併設。多世代の交流、ジョブカフェ、移民・難民の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	16	BARMBEK BASCH	ハンブルク市				○	教育相談、図書館、高齢者センター、母子センター、文化センター、教会区、子ども・家族センターの連携によるコミュニティセンター	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	17	未来の家 (Haus derZukubft)	ブレーメン市				○	保育所、幼稚園、教会と一体化されたMGH移民支援、家庭支援	○	○	○		○	○	○	○	○
	18	MGHブレーメン・スイス地区	ブレーメン市				○	高齢者支援、住戸、幼稚園など多様なプログラム	○	○			○	○	○	○	○
	19	SOS子どもの村 デュッセルドルフ	デュッセルドルフ市				○	家庭支援、幼児～青少年支援、高齢者デイケアなど SOS子どもの村の拠点施設	○	○	○	○	○	○	○		
	20	MGHミッターツェントラム ドルトムント	ドルトムント市	○			○	子育て世帯の母親をターゲットとした活動	○			○					○
	21	新しい菩提樹の庭 Der Neue Lindenhof	レムシャイト市				○	児童・青少年福祉、地域活性化事業、移住サービス、異文化交流、難民支援、家族教育、高齢者ケア	○	○	○	○	○	○	○	○	
	22	MGH アルテンキルヒュンの真ん中に	アルテンキルヒュン郡		○			高齢者支援、子育て支援、家庭支援、コミュニティ再生	○	○	○	○				○	○
	23	ヒーリングハウス・カッセル	カッセル市				○	助産院、保育所、集合住宅、集会施設、ホスピス	○	○	○	○					○
地区の家	1	地区の家サンサルバリオ	トリノ市(第8区)				○	地区の歴史的建造物を改修。移民支援、職業支援、保育所、カフェ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2	ヴィア パルティア	トリノ市(第6区)				○	カフェ、コミュニティ・キッチン、コワーキング、ベーカリー、音楽教室、多目的ホール	○	○	○	○	○	○	○	○	○

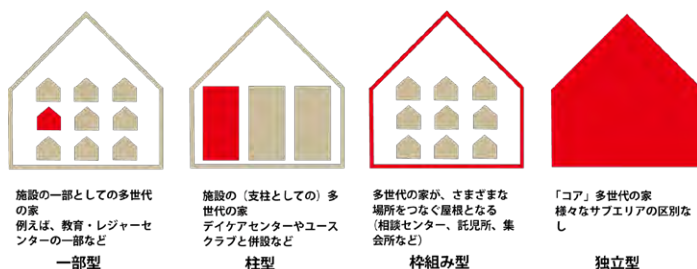


図1 ドイツ家族省が指定する多世代の家の分類

援等のプロジェクトとの同時指定により双方から資金援助を受けることもできる。

他方、日本の高度経済成長期には、さまざまな問題を抱える地域コミュニティに対して、彼らのニーズに対応しながらコミュニティを再生されるために、そのすべてのニーズに対応すべくさまざまな機能を独立して整備してきた。し

かしこれは、人口減少期に入った現在においては、意味を持たない。どのような機能をどうやって複合化すべきかに対しては何らかの運営の工夫が必須であることは、筆者も既往の研究や実践でそのいくつかの解決の方向性は明らかにしてきた^{1),2),3)}。しかし、より根本的に社会課題に対峙するためには、今まで行われてきた、実現の容易な同一の分野の中での単純な機能の複合化などでは限界がある。

2.2 研究の着眼点

人口減少期の我が国において、必ずしも公助によらないコミュニティ施設のあり方は、自立的な地域のあり方としばしば同一に論じられ、弱体化してしまったコミュニティの再生を新しいタイプの地域施設の介在によって実現させることが関心事となる。日本政府も2016年に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」の中で「地域共生社会の実現」というテーマを掲げた。地域共生社会とは、「制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係をを超えて、地域住民や地域の多様な主体が人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」と表現している。

コミュニティの再生や地域共生社会を実現するためには、多様に異なる課題を課題ごとに整理、解決していくのではなく、それらにヨコ串をさして再編成、総合化する視点が求められる。建築計画においても、領域を横断し、機能や活動の種類で領域化をつくって整理してきた境界を見直し、広井もその著書⁴⁾で語ろう

な「越境」するアプローチが重要になると考えられる。

このような中で本研究では、「多世代の家」プロジェクトが持つ、プロジェクトの立案から実施における柔軟性と多様性が従前の枠組みや課題解決への限界を越境することを可能にし、さらに異なる領域を接続しながら拡大させていくことが可能なのではないか、それによって多様な課題の解決に寄与しているのではないかという仮説を立てた。表1は、2023年より実地調査した多世代の家と既報で取り上げたイタリアの地区の家のリストである。そこでこれらの中からすでに多様な機能の連動性を既報で明らかにしたイタリアの2事例に加え、機能や活動内容に多様な項目が含まれており、それらの関係性を見ることで機能や活動の領域横断の体制をもつと想定され上記の仮説を検証できる事例と考えられる2事例、BARMBECK° BASCHとDer Neue Lindenhofに着目して分析を行う。この2事例は、ドイツ家族省による多世代の家の分類「柱型」と「枠組み型」(図1)に該当する。柱型と枠組み型は、多世代の家だけでなく、他の機能も同一の建物(敷地)の中で活動しているタイプである。

3. Der Neue Lindenhof (ノイエ・リンデンホフ)

3-1. 設立過程と機能構成

ノイエ・リンデンホフは、邦訳では「新しい菩提樹の庭」の意味である。ドイツ西部の都市でありノルトライン＝ヴェストファーレン州の州都であるデュッセルドルフから車で約1時間ほどの距離にある、デュッセルドルフ

フ行政管区に属するレムシャイト市ホンスベルク地区に立地している。この地区は昔は金属加工の職人たちが多く住み活気があったが、産業の変化や高齢化を背景に移民、難民の流入が進み、現在では移民の背景をもつ住民の割合が50%を超え、そのうち65%以上がトルコ系の住民という構成になった。移民が増えても人口減少はなおも深刻で、住宅の空き家率、店舗の空き家率も大幅に増加した。こうした中でコミュニティの弱体化を食い止め、再び結束力を取り戻すために拠点を建設するというのが設立の大きな目標となった。

金属加工の職人たちがたくさん住んでいた頃は、地域の活動は活発に行われ

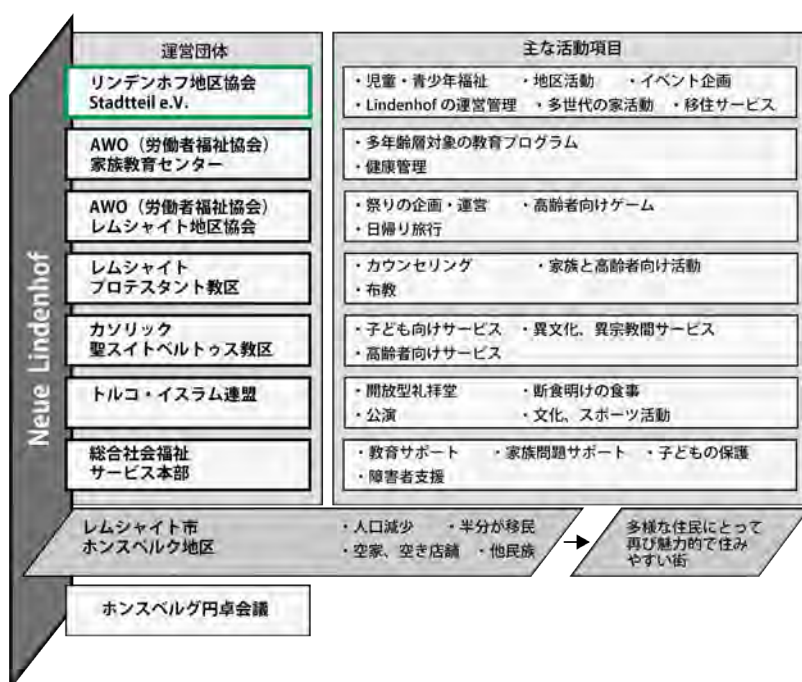


図2 ノイエ・リンデンホフの組織と主な活動項目 (緑枠は申請団体)

ていた。次第に活気が失われていく中で、1995年に Stadtteil e.V. (市区 - 登録団体) という社会団体を設立し、衰退しかけた地域を再生させる活動に乗り出した。1996年につくられたその活動拠点はリンデンホフ (菩提樹の庭) と呼ばれ、ノイエ・リンデンホフ設立後は「アルト・リンデンホフ ("古い" 菩提樹の庭)」と呼ばれている。

その10年後にあたる2006年に、地区活動を時代の要請に合わせながらより活発にさせるために、第1期の多世代の家プロジェクトに申請した (登録は2007年)。登録後に建物更新の企画を進め、アルト・リンデンホフの建物の横にあった菩提樹の木を残し、古い教会があった敷地に今の施設を建設したのが2014年である。この多世代の家は、リンデンホフ地区協会 Stadtteil e.V. という社会団体が申請者になり、AWO (労働者福祉協会) 家族教育センター、AWO レムシャイト地区協会、レムシャイト・プロテスタント教区、カソリック聖スイトベルトゥス教区、トルコ・イスラム連盟、レムシャイト市の総合社会福祉サービス本部の7つの組織で構成された組織によって運営されている。

ノイエ・リンデンホフ全体の活動目標は、世代、国籍、宗教の垣根を取り外しコミュニティの融和と結束力を高めるといったものである。多世代の家としての具体的な活動目標には、地域の融和と結合、コミュニティの自立、環境負荷低減、市民の自己決定力の強化、専門家のサポート、多世代交流を掲げている。

施設の建設は、自治体と建設会社が資金を出し合って設立した事業団体であるレムシャウト GEWAG (Wohnungsaktiengesellschaft Remscheid : 地方住宅供給公

社) の資金による。設計は、設計コンペを行い、デンマークの建築家が設計を行った。透明感を重視し、道から建物の中での活動の様子が見えること、建物自体が地域活動の広告になることをコンセプトとした。施設内にある各室は、固定の組織が利用料を支払う形で使用するオフィスの他は、どの組織が使っても良い運用としている。それぞれの部屋のインテリアに出資者・所有者がいる。3階にはレムシャウト市の総合社会福祉サービス本部のオフィスが入っており、10~11人の職員が常駐し、特に青少年支援を担当する職員が多い。

施設としては、多世代の家の特徴であるオープントレフ (開かれた集会所、自由に入ることができ、居場所となる空間) が、エントランスホールに入って正面に階段状空間として設けられており、簡易なキッチンを用意してカフェを兼ねている (写真1,2)。その横には、会議や講演会、映画鑑賞などでもできる多目的なホール (写真3) がある。3階建ての建物の各階には、軽食や飲み物を取りながらの活動もできるキッチンがついた集会室 (写真4) が設置されており、予約すれば自由に利用できる。また、自由に居場所として予約なしに使える空間も各階に設けられている (写真5)

また、多様な背景を持った市民が多い地区で運営団体にもその宗教組織が参加していることもあり、各宗教で分けてしまうのではなく、なるべく自由に出入りでき、利用できる礼拝室を施設の中に設けている (写真6)。

3-2. 活動内容からみる特徴

図2は、運営組織構成とその主な活動項目を示したものである。多世代の家の申請団体であるリンデンホフ地区協会 Stadtteil e.V. を中心に活動全体の中心とな



写真1 ノイエ・リンデンホフ エントランス



写真2 エントランスに面するカフェ



写真3 カフェに隣接する多目的スペース



写真4 キッチン付きの集会室



写真5 各階に設置された自由に使える空間



写真6 多様な宗教を容認する礼拝室

表2 ノイエ・リンデンホフの各運営団体の活動内容

	多世代 の家とし ての活 動	一般 的な活 動	児童 ・青年 支援	高齢者 支援	親子 支援	教育サ ポート	家族 支援	地区 活動	相談・ア ドバイス (一般分 野)	イベン ト*	アート 活動	スペー ス貸出	移住支 援・難民 支援	多文化 連携	他分野 間ネット ワーク	委員会 活動
リンデンホフ地区協会	12	3	4					11	2	7	5	6	16		3	
AWO(労働者福祉協会)家族教育センター			7	5				5		7	5	6	2			
AWO(労働者福祉協会)レムシャイト地区協会		1		2				4		8	1		1			2
レムシャイト・プロテスタント教区			7	6			6		1	1	2					
カソリック・聖スイトベルトウス教区		2	2	1											1	
トルコ・イスラム連盟		2								1	1				3	
総合社会福祉サービス本部			2			1	4		2							
計	12	5	22	14		1	10	15	5	17	9	6	17	4	3	2
	3		3					9		14	9	6	3			

*イベントの項目に当たる活動は、地域を活性化する、コミュニティを再活性化する活動を抽出している

□ : 活動の全数 □ : 他団体と連携した活動数 □ : 他の活動と連携した活動数 なお、他の分野、組織と連携している活動は重複してカウントした

り、他の6団体と連携しながら運営をする「枠組み型」の体制をとっている。さらに重要な要素として、活動組織ではないが組織を包括的に束ねる役割のホンスベルク円卓会議がある。多世代の家プロジェクトに参加した2007年より開始されたノイエ・リンデンホフの建設のためにつくられた参加型の組織で、近隣住民、レムシャウト市、レムシャウト GEWAG、労働者福祉協会（AWO）、地元宗教団体の代表者から結成されたものである。この組織の設立によって、様々な価値観が統合され、ノイエ・リンデンホフは、多文化、多宗教、多世代の交流の場で、出会いが実現し、相互理解が促進し、オープンな隣人関係がえられる場となることが共通のイメージとして共有化された。多世代の家の申請団体であるリンデンホフ地区協会 Stadtteil e. V. が中心になりながら、それぞれのコミュニティが持つ特異性を尊重しつつ、「一つの屋根の下」で連携できる活動をつくりだしていくこと

ができていのは、このホンスベルク円卓会議の設置が大きい役割を果たしていると考えられる。

表2に各運営団体の活動内容をまとめた注1)。特徴的なのは、リンデンホフ地区協会 Stadtteil e.V. に特に見られるように児童・青少年支援、地区活動、相談・アドバイス、イベント、移住・難民支援などの活動に対して、アート活動を通じて地区の活性化や多世代の交流、元々あった地区の祭りの再興など地区活動で達成すべき目標に繋げていることである（表に赤線で表記）。このように異なる分野の活動が連携して目標を達成する仕組みが見て取れる。具体的には、

- ① 編み物を教えて、一人ひとりが作ったものをつなぎ合わせてみんなが入れる大きなテントをつくり、イベントで展示する。
- ② 伝統的なカーニバルに子ども部門を設けて、仮装などをつくり参加する



写真 7-1,2 【地元アーティストの参加】 町民をポートレートで紹介する写真展 写真 8 【地元アーティストの参加】 古布から新たな発見

- ③ Stadtteil e.V.が主体となったまち総出の祭りを開催。
- ④ 美術家の支援によって、参加者が大小のボール型の器をつくる陶芸活動をし、できた器の中に作った人の故郷の郷土料理を盛り付け、食事会をする。
- ⑤ 上記でつくった陶器を水に浮かべ陶器同士が触れて音を奏でる子ども向けのイベント。
- ⑥ 「町の天使さん」というイベントで、写真家に町で生活、働く様々な階層の人々のポートレートを撮影し、それを展示する（写真7）。

といったものがある。地元のアーティストと協働しながら参加型のプログラム（写真8）を展開し、ある時は作る者として、ある時は表現の対象として参加できる仕組みを構築している。する側される側の双方を体験することによって多様な価値観を共有することが、地域の課題

解決にも貢献しているということが目に見えてわかるようになるというアート活動がもつ効果を活かしたプログラムに仕立てているのが特徴である。また、それらのアート活動の記録を写真や動画で残し、そうした記録自体にもアート性を持たせて展示している点も特徴である。

このような活動は、AWO レムシャイト地区協会やレムシャイト・プロテスタント教区にも見られ、それぞれの運営団体が今まで得意としてきた活動を主体としつつ、建物に入居するレムシャイト市の総合社会福祉サービス本部が互いの連携を図るように支援している効果もあると言える。

ノイエ・リンデンホフ・プロジェクトが完成した結果として、人口が増加に転じ、若者層の居住者が増えた。小学校が1校、幼稚園が2園増え、アーティストの招致

も行っている。Stadtteil e.V.は、市内の各組織や行政と活発に連携し、まちづくり会社的な役割を活動も行っている。

4. BARMBECK° BASCH（バルムベック・バッシュ）

4-1. 施設概要と機能構成

バルムベック・バッシュは、ハンブルク市ハンブルク-ノルト区のバルムベック南地区に建つ教会組織など7つの団体（教育相談センター、デーナハイド図書館、AWO（労働者福祉協会）高齢者センター、バルムベック母子センター、バッシュ文化センター、旧バルムベック教会区、子ども・家族センター KiFaZ）

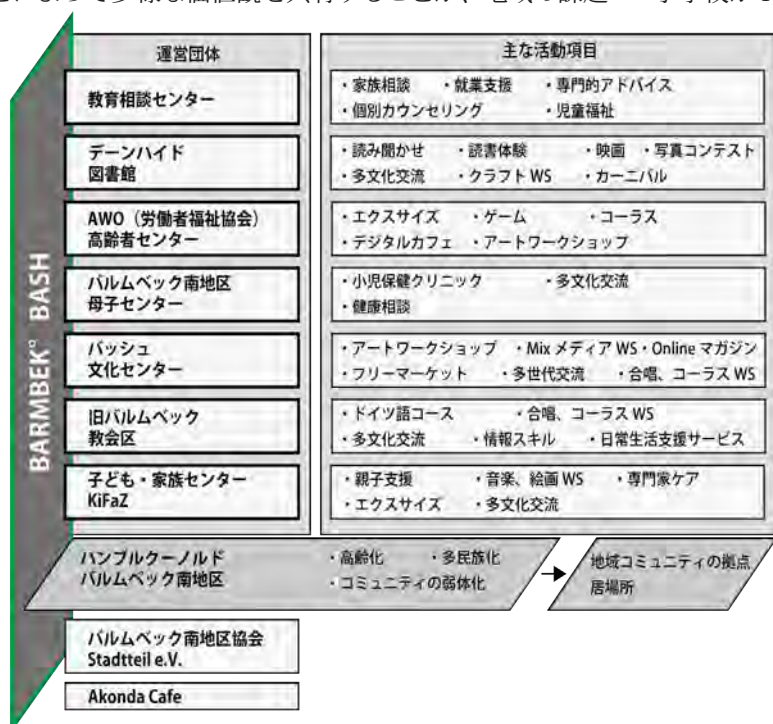


図3 バルムベック・バッシュの組織と主な活動項目（緑枠は申請団体）



写真9 全景（左：本体 右：運営団体の一つの教会）



写真10 中心となる吹抜空間



写真11 多目的に利用できる活動室



写真12 Akonda Cafe

表3 バルムベック・バッシュの各運営団体の活動内容

	多世代 の家とし ての活 動	一般 的な活 動	児 童 ・青 少 年 支 援	高 齢 者 支 援	親 子 支 援	教 育 サ ポ ー ト	家 族 支 援	地 区 活 動	相 談・ア ドバ イス (一 般 分 野)	イ ベ ン ト *	ア ー ト 活 動	ス ペ ー ス 貸 出	移 住 支 援・難 民 支 援	多 文 化 連 携	他 分 野 間 ネ ッ ト ワ ー ク	委 員 会 活 動
地区の家										2			1			
教育相談センター			1			2	3		3	2			1			
デーナハイド図書館			7			1				2	3		1			2
AWO(労働者福祉協会)高齢者センター				9					2	2		2	2			
バルムベック南地区母子センター		3		3	2					2			1			
バッシュ文化センター	1							9		9	20					
旧バルムベック教会区		7	5	11				1	1	2	5	2	13		1	
子ども・家族センター KiFaZ					16		7			2	4			1	5	
計	1	10	13	20	18	3	10	10	13	17	33		6	1	9	

*イベントの項目に当たる活動は、地域を活性化する、コミュニティを再活性化する活動を抽出している

□ : 活動の全数 ■ : 他団体と連携した活動数 ■ : 他の活動と連携した活動数 なお、他の分野、組織と連携している活動は重複してカウントした

ども・家族センター KiFaZ) が運営する施設である(図3)。老朽化した教会施設を売却し、その代金で建設をした。多世代の家のプロジェクトには、2012年から参加している。バルムベック・バッシュの場合、申請団体は BARMBEK° BASH e.V. という社団法人であり、そこに子育て支援、図書館、文化センターなどの公共サービスを担う機能が同時併設されている組織構成(柱型)になっている。

この多世代の家が立地するハンブルク-ノルド区のバルムベック南地区は、高齢化や移民の増加による他民族化などによるコミュニティの弱体化といった社会課題があり、その解決のために地域コミュニティの拠点をつくり、地域住民の自由な居場所を生み出すことを目的として設立された。

建物は3階建てで(写真9)、まず特徴的であり運営者らが強く語っていた空間が、建物の中心に位置する1階から3階を貫く吹き抜けである(写真10)。この空間が多世代の家の設置条件でもあるオープントレフ(開かれた集会所、自由に気軽に入ることができ、居場所となる空間)と位置づけられており、この周りにカフェ(AKonda Cafe: 写真12)、デーナハイド図書館、各種市民活動に利用可能な小ホールから会議室まで大きさが異なるレンタルルームが1、2階に配置されている(写真11)。2階、3階には教育相談センター、バルムベッ

ク南地区母子センター、子ども・家族センターの相談室、診療スペースなどがある。

特徴的なのは、この7つの団体が行う活動のほとんど全てがカフェ、図書館を含んだ1、2階のレンタルスペースで行われていることである。BARMBEK° BASH e.V. が全体を調整し、それぞれの運営団体が役割分担をしながら、自分たちの得意な活動を行い、地域の社会課題を解決していくというマネジメントが行われている。

4-2. 活動内容からみる特徴

表3に、各運営団体の活動内容をまとめた注2)。バルムベック・バッシュとノイエ・リンデンホフを比較すると大きな特徴として、同じ活動内容を他団体と連携して行っている活動が多いことである(表3に青線で表記)。これは、地域課題として特に重視しているコミュニティの再活性化を図るために、一つの組織体としての活動ではなく、専門的な知識や人材を有する複数の組織や団体が連携してサービスを提供することで多様な地域のニーズに的確に対応できるようにという考え方に基づいたものである。

具体的には、BARMBEK° BASH e.V.、デーナハイド図書館、子ども・家族センター KiFaZ、旧バルムベック教会区、バッシュ文化センターが連携して、国際女性デーに合わせて映画と展示を組み合わせたイベントを行う。異なる運営団体が協力連携して、多世代の家バルムベッ



写真 13 【2つの活動団体を連携】
編み物を背景に写真を展示



写真 14 多様性をテーマにした子ども漫画集

ク・バッシュ全体として統合した活動が行われているものがある。これらの中には、多世代の家の中での連携活動だけでなく、地域の公園なども使って行われるものもある。

また、地域課題として大きな問題である移民の増加、他民族化などに対応するためには、設置団体の BARMBEK

ラムがある。生活の中で発見されるテーマをアートの専門的知識を持つ学芸員が芸術的視点で支援して作品化する。普段の生活の中での何気ない地域の出来事を「赤い糸（繋がり、関係のメタファー）」をテーマに撮影した写真展の企画に対して、その展示の仕方として、別の編み物サークルが協働して、赤い糸を使った編み物をタペストリーとし、そこに写真をレイアウトして展示していくという企画を実施した（写真 13）。写真とタペストリーというアート活動を用いた、協働で一つの企画を行い、一つの作品を制作、実現していく中で参加者同志の交流を図り、それぞれの存在や地域の出来事を再確認して、地域の絆を再構築していくプロセスがつくられている。

また、ミクストメディア・ワークショップを開催し、映画、写真、オーディオ、絵画などさまざまなメディアを用いて地域についてレポートをするオンラインマガジンの作成や、地域課題の解決を漫画で表現するといった活動をアーティストの指導のものに行っている（写真 14）。

このように、活動が単体で完結するのではなく、一つのテーマに2、3の別のアート活動を組み合わせて一つの作品にするという、複数の活動を関連づけ、統合する活動デザインが採用されている（表3に赤線で表記）。ドイツでは「赤い糸を通す」という表現は、複数の事柄を一つの大きな軸となるテーマのもとで束ね、統合することを意味する。例示したプロジェクトのように、参加者は自分の得意な分野で協力をしながら、結果として一つの作品が出来上がっていくプロセスに参加する。協力と融和、交流が体感されることによって、地域のコミュニティを結束させていくという大きなコンセプトが日々の活動のつむぎ合いの中で実現している。

以上のような他団体との連携だけでなく、デーンハイド図書館では、活動分野を横断して複数の活動内容を含んだ複数の目的を同時に達成できるような活動も行っている（表3に緑線で表記）。このように社会、医療、介護、福祉と文化それぞれの専門家が配置され、地域課題を複合的、統合的に解決していく拠点を単体の公共施設としてではなく、複合的で多様なニーズに対応するドイツ初のコミュニティセンターとしても位置付けられたのがバルムベック・バッシュなのである。

5. まとめ

5-1. 本稿での知見のまとめ

BASH e.V. と AWO の協働事業として、ドイツ語だけでなく、アラブ語、英語を使った難民相談窓口を開設している。多世代の家の複数の運営団体で連携して問題を解決しようとしている。

さらに、子ども・家族センター KiFaZ は、助産師、社会教育学者、家族保険・看護ケアワーカー、医師、セラピストなどさまざまな分野の専門家で構成されており、0-3 歳の子どものもつ家族の支援を行っている。

プログラム数だけを見ると多い順で、親子支援（出産、妊娠などの相談も含む）、イベント、アート活動、高齢者支援と続く。地域が抱える移民の増加、多民族化、高齢化などの課題に直接関連するサービスが多いのは当然だが、注目されるのはバッシュ文化センターが展開するアート活動である。

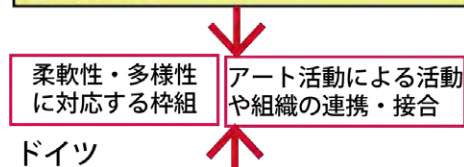
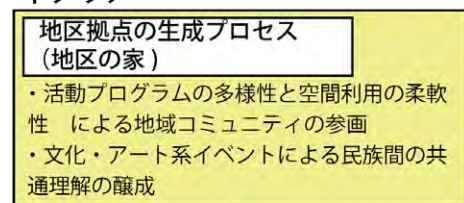
バッシュ文化センターでは、世代や障害などを越えて、異文化間の繋がりを築くことを活動の目標としている。そのために、通常の認識では同様な次元としては扱わないものをあえて掛け合わせることによって、繋がりの効果を波及させようとする活動を行っている。

代表的な活動として、アートを用いた参加型のプログ

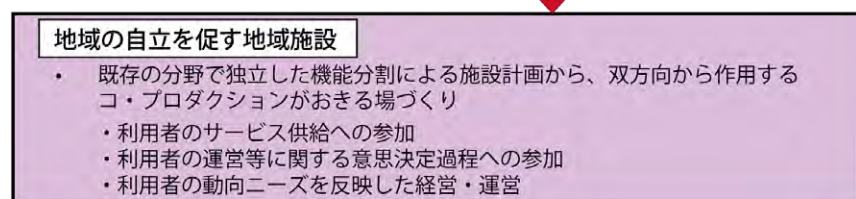
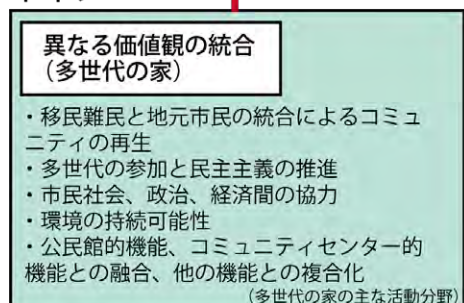
以上、2つの事例から抽出できる活動の特徴の中で着目されるのは、以下のようにまとめることができる。

- ① 地域ごとに組織体制にはそれぞれの特徴が見られるが、必ずしも自治体だけでなく、地域で活動するさまざまな社会団体が運営組織を形成し、「多世代の家」という拠点を運営している。
- ② ノイエ・リンデンホフでは、地域の課題を丁寧に掘り起こし、異なる活動が連携することによって生まれる活動の柔軟性によって、さまざまな目標を達成できるようなプログラムが組まれている。
- ③ バルムベック・バッシュでは、異なる分野の活動同士が連携すること以外に、異なる団体で連携することによって、多様に存在する地域コミュニティのニーズや課題を解決していこうとする活動が行われている。また、その際に、拠点の運営団体で全体を統括する組織が多様な専門家の力をうまく連携させることも行って地域コミュニティが持った課題を総合的に支援していく多様性を獲得していることがわかる。
- ④ 上記の活動に対して、アートを使った活動を取り込んでいることが特徴的である。子どもから高齢者ま

イタリア



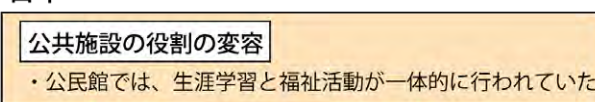
ドイツ



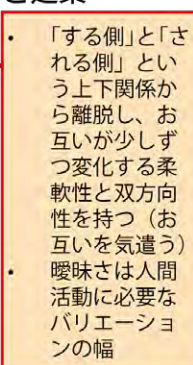
でが分け隔てなく関わることをできるように、芸術文化活動を使って参加型の取り組みを行うことである。参加型の取り組みは、住民がアートをつくる側とアートの対象となるされる側双方に関わることになり、そのプロセスの中で多様な価値観を共有し、地域課題に関する自らの立ち位置を考えるきっかけをつくっている。そのことがコミュニティの再生とそれによる生活の豊かさをもたらす活動へと展開している。

このように、多世代の家から得られる知見として、コミュニティの拠点を再整備する中で、地域コミュニティの自立を促すためには、活動のプログラムや活動手法の中に、活動領域をあえて横断、越境して、新たな価値を見出すという柔軟性や多様性を持たせることで、人々を再接続する効果があることが示唆される。既存のコミュニティが弱体化する中で、移民、貧困、ダイバーシティなど新たな課題に対応した地域のコミュニティ拠点を作ろうとした際に、コミュニティ同士の連携と協働が必要不可欠になる。本稿で紹介した2事例は、それらを束ねていく取り組みとしてアート活動が多大なる寄与をしている事例である。

日本



「ケア」の概念と建築



社会変化と施策、法改正

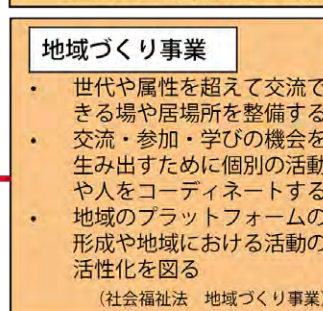
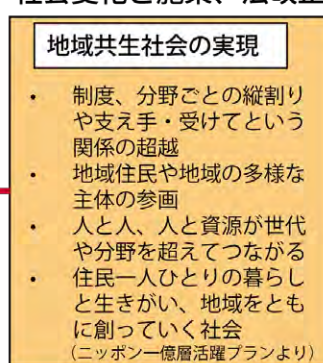


図4 アート活動がもたらす地域施設、自立的地域構築のための役割

既報で分析したイタリアのトリノ市で展開する「地区の家」の活動（表1に示す、地区の家 サンサルバリオとヴィア・バルテア）の中からも活動プログラムの多様性と空間利用の柔軟性が地域住民の参画を容易にすることができること、その際に地域の生活文化の向上支援として演劇ダンス系、芸術文化系、音楽系などのプログラムが効果をあげていたことを抽出しており、ドイツの多世代の家でも同様な状況を抽出することができる^{1),5)}。

5-2. 文化とアートによるコミュニティ連結についての考察

最後に、ドイツの多世代の家、イタリアの地区の家という施策や活動から日本のコミュニティ拠点づくりや自立的地域構築に活かせる知見を検討する。図4は、ドイツ、イタリアの調査を含めて、地域のコミュニティ拠点の役割と文化・アート活動が持つ役割を日本での施策と関連づけて整理したものである。佐々木が著書の中で整理しているように⁶⁾、日本における地域共生社会の実現に向けた施策の方向性を整理することによって、ドイツ、イタリアの事例の中で抽出された「文化・アート活動」の意味が、日本における今後のコミュニティ拠点の整備においても「異なる価値観の統合」や、「居場所」、「交流・参加・学び」といった求められる役割に対してもまさしく重要なものであることがわかる。近年増加してきているアートとケアの議論の中でも、小川は、「美術は偏った先入観を壊して社会を治癒の方向に持っていく本当の意味でのケアをしている」⁷⁾と述べている。また、ケア側でも、ケアとはまさに共同創造であり、する側とされる側という上下関係から離脱して「お互いにちょっとずつ変わりうるもの」として考えられることの重要性を福祉系の地域施設に関わる建築関係者も認識し出している⁸⁾。

さらに、新たなコミュニティ主体で地域を支えていく取り組みを可能にするためには、アートやケアの概念と同様に、双方向性を持った空間計画や運営の仕組みをとっていくことが必要となる。小田巻は、それを「コ・プロダクション」と呼び、公的なサービスを生み出す過程で、自発的な利用者と専門家による協働がサービスの質と量を高める概念として説明している⁹⁾。図4に示したように、イタリアの地区の家やドイツの多世代の家の調査では異なる価値観をもつコミュニティの再編にあたって、文化やアートによる住民の連携や接合が積極的に取り入れられている事例があること、またそれによって実効性ある関係性づくりが実現していることを明

らかにした。さらに、「する—される」の固定的関係性を越境するケアの概念からも誘導されるように、文化やアートは双方向性や柔軟性をうまく導き出すように作用し、我が国の行政施策や事業で掲げられた地域共生社会の実態を伴う実現に向けた道筋のひとつの鍵となりうるのではないか。

イタリアやドイツの多くの事例を調査することで明らかにしたこの概念を用いた実践例を日本側にどのように着地させることができるのかについては、今後引き続きの検討課題としたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤B）「ケア中心方社会の基盤となる持続的な「共在の場」とケアの関係構築に関する包括的研究（研究代表者：山田あすか、東京電機大学）（課題番号：22H01668）」の一環として行われました。

注釈

注1）現地調査によるヒアリング、収集資料に加え、Der Neue LindenhofのHP <https://der-neue-lindenhof.de/>（最終閲覧 2025.03.03）によって得られたデータを用いた。

注2）現地調査によるヒアリング、収集資料に加え、BARMBEK° BASHのHP <https://barmbek-basch.info/>（最終閲覧 2025.03.03）によって得られたデータを用いた。

【参考文献】

- 1）小篠隆生、小松尚：多機能型コミュニティ拠点の創成プログラム -トリノ市における「地区の家」を事例にして-、日本建築学会計画系論文集、第82巻、第737号、pp.1649-1659、2017.07
- 2）小篠隆生：文化によるまちづくりで形成される地域の拠点、ケアする建築、山田あすか、鹿島出版会、pp.190-195、2024.01
- 3）小篠隆生：新たな地域拠点形成に必要な適疎まちづくりシステム -東川町における連鎖的公共施設の再編によるまちづくり-、公共建築、Vol.66-2、No.227、pp.14-23、2024.11
- 4）広井良典：ケア学 越境するケアへ、医学書院、2000.09
- 5）小篠隆生、小松尚：「地区の家」と「屋根のある広場」イタリア発公共建築のつくりかた、鹿島出版会、2018.12
- 6）佐々木秀彦：文化的コモンズ 文化施設がつくる交響圏、みすず書房、2024.03
- 7）小川公代：固定観念に抗う「ケアの時代」の想像の力、美術手帖、vol.74、no.1092、2022.02
- 8）Care for the Community、SD 2024、鹿島出版会、2024.12
- 9）小田巻友子：ポスト福祉社会におけるコ・プロダクションと協同組合 -福祉供給をめぐる利用者主権の確立、社会政策、8、(1)、社会政策学会、2016